**第６回・日本アイリス・マードック学会報告**

**古田島　綾子**

　十月九日(土)、東京大学本郷キャンパスの山上会館にて第六回日本アイリス・マードック学会が開催された。第二回目の東京大会となる今回は、折りしも当日関東地方に台風の直撃が予想されており一時は延期の声も囁かれていた。しかし、これまで幾多の天変地異にも屈することのなかった当会らしく今回も予定通り開催の運びとなった。当初は悪天候のため出席者の出足が懸念されたが、午前の部、午後の部と時間を追うごとに人数は増え、最終的には五十名ほどの参加者を数えた。

　総会は十時から平井杏子氏の司会で行われた。会長の室谷洋三氏はご挨拶の中でまず天変地異に見舞われる当会の宿命にふれられ、それでも今年も無事に学会員が集えたことの喜びを語られた。さらに今年九月にキングストン大学で開かれた第二回アイリス・マードック学会のこと、海外の研究者からもホームページを通じて当会に関心が寄せられたことなど、マードック研究の国際的な輪が広がりつつあることに言及された。また、日本国内ではマードックと宮沢賢治の関連性が新たに注目を集めていることを紹介された。会長挨拶に続いて橋本信子氏から理事会報告があり、次回の開催地とその時期、さらにはホームページのよりいっそうの充実に関して提案がなされた。その後、事務局の駒沢礼子氏による一年間の活動報告があり、続いて小野順子氏から会計報告が行われたが、キングストン大学のマードック蔵書収集のために当会員から寄せられた寄付に対し、改めて謝辞が述べられた。こうして役員全員の承認のもと、約一時間の総会は終了した。

　今年は例年と異なり午前中から研究発表が行われた。ウェンディ中西氏の発表、”Character and Characterization in Iris Murdoch’s The Good Apprentice”（司会、ポール・ハラ氏）ではマードックの描く登場人物が非現実的であるという氏の指摘に対し、オックスフォードの知的階級にとっては十分リアリティがあるのではないか、という意見が出された。

　昼食後に午後の部として二つの研究発表が行われた。中上玲子氏は”Truthful Lies and Fantasy Realism: Iris Murdoch’s Under the Net and Muriel Spark’s The Comforters” （司会、井内雄四郎氏）でマードックとスパークをナラティブ・セラピー理論の観点から比較したが、物語を通して癒されるのは果たして誰なのか、マードックはなぜ主人公に男性を選んだのか、などの質問がよせられた。続いてポール・ハラ氏の”The Riderless Horse Moves on: Equine Symbol in Iris Murdoch’s Jackson’s Dilemma”（司会、ウェンデｲ中西氏）はマードックの詩の引用から始まり、作品の中に頻出する馬の象徴的意味に焦点をあてて見せた。発表後、聴衆からマードックの作品によく登場する他の動物、特に犬に関しての言及があった。

　休憩をはさみ、特別講演が行われたが、今年は幸運にも二名の特別講師を迎えることができた。塩田勉氏は「マードック、コミンテルン、プラトン、ゼン」(司会、室谷洋三氏)でマードックの思想的変遷を各思想の時代背景と結びつけて解説されたが、時にユーモアを交じえた氏の講演に聴衆一同が聴き入った。続いてフランスから来日されたジョージ・ヒューズ氏による講演”I discovered words and words were my salvation: Iris Murdoch and the Problems of Language” (司会、高橋和久氏)が行われた。氏はA Word Child をとりあげ、マードックと当時のオックスフォードの哲学者達の言語に対する姿勢を比較された。講演が終ったところで残念ながら時間となってしまい、質疑応答は懇親会へと持ち越されることとなった。こうして全ての講演が終了し、高橋和久氏の閉会の辞をもって今年のアイリス・マードック学会は無事幕を閉じた。

　その後の懇親会は同会館の一階で開かれた。雨足が激しくなる中、二十名を超す出席者が榎本眞理子氏の司会のもと、食事を楽しみながら互いの近況報告やマードック談義に花を咲かせた。最後に素晴らしい会場を用意してくださった高橋和久氏への謝辞が再度述べられると、出席者から拍手がわきおこった。一同が会場を出る頃には台風も過ぎており、一転してさわやかな秋の夜空の中、来年の再会を祈りつつ散会となった。